# 保育への視座(9)

## ――若い保育者の方々へ――

河邉　杲

「ジョーイはたったいま、目をさましたばかりです。そして、ベビーベッドのわきの壁に当たっている四角いお日さまの光を見つめます。

あそこで空間が光っている。

やさしい磁石がつかまえようとして引っぱっている。

空間がだんだん暖かくなって、息をしはじめる。その中で、ゆっくりとダンスをしながら、いくつもの力がぐるぐるとおたがいのまわりをまわりはじめる。…略……

ジョーイにとって、世の中との出会いは、そのほとんどが劇的で情緒的なものです。それはわたしたち大人にははっきりわからない性質をもつドラマです。いまこの部屋の中にあるものすべてのもののなかで、ジョーイの関心をとらえて離さないのは、四角いお日さまの光です。ジョーイはその明るさと強烈さに、目を奪われています。生後六週間のいま、ジョーイの目

は、まだ完全とはいえませんが、かなりよく見えるようになっています。……略……」と。

これは、ダニエル・スターン（アメリカ・幼児心理学者）著　亀井よし子訳の『もし、赤ちゃんが日記を書いたら』（草思社）の日記文の冒頭の抜粋である。

ダニエル・スターンが、そのはじめに書いていることを抄述すると、「赤ちゃんとその両親を観察していると、親がどれほど赤ちゃんの内面生活を知りたがっているかが、痛い程わかる。そこでお父さんやお母さんがほとんど無意識のうちに赤ちゃんに話しかける言葉に耳を傾けてきた。……「そうか！　それが好きなのか」「やっぱり、緑色のはいらないのね」「はいはい、わかりましたよ、もう待てないのね、すぐですからね」「ほうら、これでさっぱりしたでしょう」などと話しかけている。親は、このように赤ちゃんの気持ちや欲求を自分なりに解釈することによって、つぎに何をなすべきか、どう感じるべきか、どう考えるべきかを探るのだ。……あなたがだれかを愛していれば、その人の立場に立って、気持ちを推し測り、その思いを共有したくなるはずである。まさにそこから親近感や共感が生まれる。……おそらく赤ちゃんの表情から、そしてつい、いましがたまで、あなたと赤ちゃんのあいだで起きていたこととの関連から、赤ちゃんの動機・願望・感情を推測するはずだ。つまり、あなたの想像力が赤ちゃんの表情や動作の意味を知り、ある解釈を見つけ出すのだ……略…」と。さらに「こうした解釈がつぎに赤ちゃんにどう接するべきかを知る指針となると同時に赤ちゃんが自分自身の経験について学習するための助けともなる筈である。」と説いている。そして生後六週間から、自分でお話がつくれるようになる四歳頃までの発達段階を追って赤ちゃんや幼児の心象風

景が描き出されていて、大へんユニークな本である。これはきっと保育に直接たずさわっている先生方にとっても保育についての新たなる示唆を与えられるに違いないと思ったので是非一読してほしいと思いここに紹介させてもらったのであるが、もう一つは、特に、保育に関する基本的な考え方や態度の見直しに大いに参考になるのではとも思ったからである。つまり、保育方法がややもすると自然科学思想にもとづく因果論や決定論に依り、操作主義的な方法に陥っていることに気づき、これを考えなおしていく参考にしてほしいということである。

さらに、最近あちこちの園内研修で実践研究に実践の記録が問題にされているが、形式の有無はともかくとして、「幼児の活動」「教師の援助（意図）」「その考察（省察）」の三つの要素で記述されている。そしてその「幼児の活動」については最近よく観察され、個人の言動等について詳細に記録されるようになってきていることは評価されるべきと思うが、やはり、まだ客観的な事実としてこれを把握しなければとされる態度が見られその活動が極めて外見的なものになっていることが目立つのである。例えば、四歳児入園当時によく見られる朝の出会いやあいさつなどの活動（その姿・表情・態度やことばなど）に見られるさまざまな個々の異質なるものが見のがされていたり、その様々な生活態度に対する保育者の想いや考え方やその対応の様子などが欠如しているものが多い。

また子どものいろいろな姿態・つぶやき・活動の姿とそれへの保育者の対応とその対応の背景となっている保育者の考え方、感じ方、見方などについて見のがしたり、とりこぼしていることはないだろうか。特に保育者の想いとか意図に記述されてあることの多くは保育者の一般的なねがいのようなものになっている。保育者

も人間だから常に感覚、感情が働いている。また価値観をものさしにして他人の行動を見ている筈である。こうしたことをあるがままに記述していくことが、保育者自身が自己理解を深め、保育を改善していくための第一歩になることは既に承知されている通りである。これらのことに前述の本は何等かの参考になると思う。

いまひとつは、保育の中で迷いをもたれたことについて迷いのまま、または極めて理解し難い活動に出会ったら、その不鮮明のままを記録にとどめて置くことが必要である。

案外、記録には、はっきりした明瞭なすぐ理解できる活動のことのみが記述されていて、個人的な問題になるとこの迷いや不鮮明な活動のことなどについては質問されたりするので、おやっと思うことがある。

ところで、前述の『赤ちゃんが日記を書いたら』で最も参考になると思われるのは、その内容と共に記述のし方であろう。子どもの心持ちや心のゆれうごく状況をことばに置きかえてみることが大事である。

例えば雨ふりの日に窓からじっと空を眺めている子どもがいれば、その側に一緒に立ってみるとその子どもの心持ちに近づくことができるかも知れない時がある。四月入園当初からやっと砂あそびに慣れて来て、きょうもと思っていたら雨になって、早く晴れてくれないかなと空をながめているであろうことが推察できる時もあり、彼にそのことをたしかめてみることによって一層よく理解できることもある。こうした自然環境とむき合っている場合や、友だちとトラブルが起きた時の両者の心持ちに対応した時など、当然対話の形で、そこで保育者が感知したことも含めて記述して置くことも大切である。

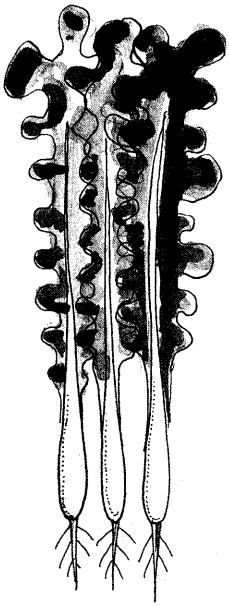
また、個人についてすでに先入観のようなも

のをもっていてそれとは全く別の面が見られたり感じられた時などはその発見の驚きをも含めて記述できると思う。

このように保育実践の記録が個人または小さなグループに関して内面に即した記述が整って来ると、当然、子どものそれぞれの世界を日記あるいはドラマのようなものに綴ることもできるようになると思う。

特に子どもが創り出す活動が集団という力を利用して一層機能するように援助していくためには、その子どもとのかかわりの一コマ一コマを子どもの内面に即してできるだけ接近するよう心がけたいと思う。またそれを可能にするのに、これらをいろいろな表現形式で綴ってみることも意義がある。日記であれ、伝記であれ、歴史であれ、劇であれ、詩歌であれ。

それぞれの子どもの日常生活を子ども自身が自己について語るように刻まれ、それが蓄積されて行くとき子どもは成長し、成長のメモリアルがそこに残るに違いない。このことは保育者自身についても言いうる。



（元洗足学園短期大学）